

## お互いを認め合える，居心地のよい学級作り

～小グループから学級全体の活動へ～

### 1 学級集団の状況（小学校6年生 男子17人，女子6人）

本校は三河山間部にあり，各学年1クラス，全校児童139人の小規模校である。したがって，入学から卒業まで同じ学級集団で生活している。男子は活発で様々なことに興味関心を抱き，すぐに取りかかろうとするエネルギーにあふれている。その男子の迫りに押され気味の感がする女子だが，しっかりと自己主張できる子も少なくない。すぐに行動に移そうと動き出すのはよいのだが，話半ばで行動するので，何をするのか分からなくなり，結果として全体が騒々しくなってしまう。同じように友達の意見を最後まで聞ける子が少なく，話し合いが深まることなく活動が中途半端になる傾向がある。

昨年度末に行ったQ-U（学級生活アンケート）の結果を見ると「学級生活満足群＝39.2%」「侵害行為認知群＝13%」「非承認群＝17.4%」「学級生活不満足群＝30.4%」となっている。学級生活不満足群が非常に多いのが特徴である。ささいなことで争いが起き，友達に対し，きつい言葉でののしる場面がよく見られる。これらの原因として「友達と協力し合う（認め，認められる経験）ことがなかなかできない」ことが考えられる。だから，小グループで聞き合う活動を多く取り入れ，次第に，認め合う活動へと小さな段階を経ていく必要がある。そして，小グループから，学級全体に活動が広がり，大きな達成感（行事など）を共有することで，子供たちはお互いに認め合い，話を聞き合える温かい人間関係を育むと考えた。

本研究を進めるにあたり，A男と，B子を見つめる子とした。二人は学級生活不満足群に属している。A男は自己主張をしようとするが空回りし，周りから認められることが少ない。そのため，疎外感を感じており，友達と一緒に遊んだり，友達を認めたりすることができない。B子は周りから嫌がらせを受けても我慢してしまう。そのため明るい気持ちで友達と遊んだり，認めたりすることができない。休み時間には一人で絵を描いたり，本を読んでいることが多い。

### 2 実施した場面と時期

月	主な行事	活動の場面	ねらい	内容
4	入学式 始業式	1 朝の会 2 朝・帰りの会 3 学級活動	友達理解 友達理解 友達理解	「引いて当たって，こう呼んで」 くじで指名された子が呼んでほしいニックネームを発表し，みんな で，その日一日，ニックネームで呼ぶ。 「サイコロトーク」 さいころを振り，出た目によってスピーチの内容が決まる。 「友達の夢，それいいね」 自分の夢をカードに書き込み，グループ内で回し読みをし，感想交 流をする。
5	修学旅行	4 家庭科 5 図画工作 6 学級活動	温かい人間関係 自分発見・友達理解 自分発見・友達理解	「いいとこ見つけ」（本文参照） 「いいねーこの作品」（本文参照） 「あなたはステキ」（本文参照）
6	郡バカッ ボール大会	7 学級活動	自己主張・友達理解	「ムカデのしっぽ取り」（本文参照）
9	運動会	8 学級活動	協力・聞き合う	「食べ物の里」 様々な情報を聞き合い，一つの課題を解いていくエクササイズ

		9 学級活動	信頼関係・学級の輪	「心の花束」(運動会の前後で) (本文参照)
11	学芸会	10 学級活動	信頼関係・学級の輪	「 で賞」(学芸会后) (本文参照)
12		11 学級活動	温かい人間関係	「2学期の友達のいいところ」 教室を動きながら、友達の背中に貼ってある紙に、その子が2学期に頑張ったことを書き込んでいく。
		12 家庭科	高学年の自覚	「一緒に作って食べよう(一年生との合同授業)」 (本文参照)
1	書初会	13 朝の会	他者理解・学級の輪	「カウントダウンカレンダー」 卒業までのカウントダウンカレンダーを作り、そこにメッセージを書き込んでいく。
		14 学級活動	他者理解	「ふわふわ言葉とちくちく言葉」 ほめ言葉と、意地悪な言葉を役割演技の中で言い合い、言う側・言われる側の気持ちを考える。
2		15 学級活動	他者理解	「思い出ビンゴ」 1人1人の今年一年の思い出をビンゴにして、思い出を語り合うエクササイズ。
3	卒業式	16 家庭科 学級活動	感謝の気持ち 友達理解	「感謝の気持ちを込めて～編物～」 (本文参照)

### 3 実践

1学期は一人一人がお互いに認め合える雰囲気を作る必要があると考え、友達の考えにふれ、自分や友達の良さを見つめることができるエクササイズを行った。そして、だんだん認め合える雰囲気を作り、小集団から学級全体で認め合えるようなエクササイズを構成していった。

#### (1) 活動1 「引いて当たって、こう呼んで(ショートエクササイズ:オリジナル)」

##### ア ねらい

- ・ 友達の考え方に触れる。友達の考え方に触れることで、友達理解が深まる。

##### イ 活動の内容

- ・ 朝の会の時くじを引き、当たった子はその日一日、友達から呼んでほしいニックネームを発表する。
- ・ 学級の子は当たった子をその日一日、ニックネームで呼ばなければならない。
- ・ 帰りの会の時、なぜそのニックネームにしたかをみんなで考え、答えを発表する。

##### ウ 参加者の様子と課題

はじめは、ニックネームで呼ばれることに恥ずかしさを感じていた子供たちだったが、次第に、ニックネームを工夫するようになった。中には、過去にあだ名にされた悪口をあえてニックネームにする子がいた。帰りの会で、当時のことを振り返り、「嫌だと思っていたあだ名をあえてニックネームで呼んでもらったのは、ぼくが嫌だと思っていたことをみんなに知ってもらいたかったからだよ」と話していた。まわりからは「C男は嫌な思いをしていたんだ。悪かった」と反省する声が聞かれた。そしてC男は「でも、今はみんなが優しくなったような気がするから、昔のことは気にならなくなったよ」と話していた。毎日のように繰り返されるこのエクササイズ。子供たちは、「あの子はどんなニックネームにするのかな」と楽しみにしている。

数か月で飽き始めるので、名札や腕章など、アクセントを考える必要がある。

#### (2) 活動4 「いいところ見つけ」

##### ア ねらい

- ・ 友達のよいところ、頑張っていたところを認め合うことで、温かな人間関係をつくる。

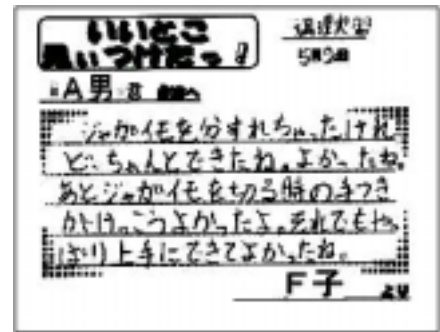
#### イ 活動の内容

- ・ 家庭科の調理実習後に友達の料理や実習の姿を思い浮かべ、「いいところ見つけたカード」に友達の名前を書き、その子のよいところを書く。カードは何枚書いてもよい。
- ・ 書き終えたカードは、一斉に動き回り「いいところ見つけた」と言いながら友達に手渡す。
- ・ 最後にもらったカードを読み、感想を出し合う。

#### ウ 参加者の様子と課題

楽しかった調理実習を友達のよいところを思い浮かべながら振り返ることでより素敵な思い出として残ったようだ。A男は友達の頑張っていた姿やよかったところをなかなか書くことができなかった。一人、5、6枚は書いていたが、結局A男は2枚書くのが精一杯であった。シェアリングの中でA男は「D君がぼくの作ったきんぴらがおいしかったと書いてくれた。うれしかった。それに、F子さんがジャガイモを切る僕の手つきがよかったって言ってくれた。

資料1 F子のカード



うれしいな」と発表した。友達からほめられることで今後のやる気が変わっていく様子が見られた。A男には「友達は、A男君のことをよく見ていたんだね。そんな友達のことどう思う」と聞いたところ「うれしいよ」と答えてくれた。友達の「おいしかったよ」「上手だね」と言った、ほめ言葉でA男は「みんなに見てもらっている」という安心感をもつことができた。また、学級の仲間としての帰属意識も高まった。これらの積み重ねでA男が友達を肯定的に見つめていけることを願いたい。

一枚もカードをもらえない子がいるかもしれないので、同じグループの子には必ず書くように指導した。

### (3) 活動5 「いいねえこの作品」

#### ア ねらい

- ・ 友達の作品により深くふれることで、友達理解につながる。
- ・ 自分の作品のよさを再認識できる。友達の考え方に触れる。

#### イ 活動の内容

- ・ 図工や家庭科の作品を机の上に置き、作品カードに自分の名前を書く。
- ・ カードを集め、シャッフルし、配る。自分のカードがこないようにする。
- ・ カードの子の席に移動し、作品のよいところを紙に書き、自分のサインを書く。
- ・ 全員が書けたところで席に戻り、自分の作品のよいところを書き足す。

#### ウ 参加者の様子と課題

友達の作品をじっくりと見て、作品のよさを考える姿が見られた。また、自分の作品のよさを神妙な面持ちで見つめ、その後ニコリとする場面があちらこちらに見られた。シェアリングでは「自分では思っていなかった、自分の作品のよさを友達が見付けてくれた。ありがとう」と言った声が聞かれ、子供たちはうれしそうであった。A男は友達の作品のよさを書くことがなかなかできず、困っていた。以前は書けないことに対して別に困った様子も見せなかった。しかし、このころから「何とかしてよ

いところを見つけ出し、書いてやりたい」という気持ちをもっていることを話してくれた。明らかに以前とは違うA男がいた。

#### (4) 活動6 「あなたはステキ」

##### ア ねらい

- ・ 友達から見た自分を知ること、自分のよさを見つめ直すことができる。
- ・ 友達のよいところを見つめ直すことができる。

##### イ 活動の内容

- ・ グループになって(5・6人)座り、緑カードに自分の名前を書く。
- ・ グループ内で緑カードをシャッフルし、配る。自分の名前がこないようにする。
- ・ 白カード(3枚)に緑カードの子のいいところを書く。色鉛筆で書き、グループ内で同じ色にならないようにする。一枚に1つ書く。
- ・ グループ内で白カードを集め、トランプのようにシャッフルし、配る。
- ・ 右回りに、一枚ずつ渡し、3枚のカードをそろえていく。(同じ子のカード)3枚そろったら、勝ち抜けをする。
- ・ その3枚のカードが誰のものをグループ内で考え、答え合わせをする。

##### ウ 参加者の様子と課題

友達のよいところが書かれたカード(資料2)が次々と回ってくるたびに、この子は誰かなという声が聞かれた。カードを揃える場面と、その揃ったカードが誰のことを書いているのかを考える場面の2場面で学級は盛り上がっていた。

自分が抱いていた友達のよさとはちがうよさを、他の子もっていた。そのことにふれることで、友達のよさは人それぞれちがうし、よさを見る眼もちがうことに気付く。その触れ合いの中で、友達を見つめる心が温かくなっていく。また、自分が思ってもいなかった自分のよさを友達に書いてもらうことで、自分を見つめ直す機会になった。

B子は「自分がそんなにおもしろいとは思わなかった」と感想で書いていた。そして「自分のよいところが分かって、これからはもっとおもしろくしていこうと思った」と締めくくっていた」

#### 資料2 B子のカード



#### (5) 活動7 「ムカデのしっぽ取り」

##### ア ねらい

- ・ チームの中での話し合いに積極的に参加することで、自分の考えをうまく伝え、友達の考えを受け入れ、チームとしてよりよい作戦を考えることができる。

##### イ 活動の内容

###### <エクササイズルール>

- ・ 4つのチームに分け、それぞれが縦に並び、前の子の腰などを持つ。(ムカデになる)

- ・ 最後尾の子の腰にはちまきをつけ、しっぽとする。途中で手がはずれたら失格。
- ・ たくさん、相手のしっぽをとったチームが勝ち。
- ・ 次第にチーム数を減らし、1チームあたりの人数を増やしていく。
- ・ リーダーのみ、声を出し、指示を出すことができる。(リーダーは先頭ではなくてもよい)

#### <エクササイズの流れ>

- ・ チームを作り(4~5人ぐらい)ムカデになり、チームごとに作戦を立てる。
- ・ 合図とともにしっぽ取りをする。
- ・ アクシデントごとに動きを止め、子供たちとともにルールを確認する。
- ・ 1回戦の結果を盛大に発表し、1回戦をふまえて作戦会議をする。
- ・ 2回戦を行う。
- ・ 3回戦はチーム数を減らし、新しいリーダーを選び、作戦を練る。
- ・ 時間が許す限り、チーム数を減らし、その都度話し合いを持つ。

#### ウ 参加者の様子と課題

「ムカデのしっぽ取り」が始まる。男女が少し恥ずかしがりながら、前の子の腰を手でつかむ。リーダーの指示を聞きながらムカデが動き出す。相手の激しい動きについていこうとすると、手がすぐにはずれ、負けてしまうムカデ。一回戦はあっという間に決着がついてしまった。

作戦会議の話題はムカデが分解しない方法が中心になった。

「こうやって前の子の腰をつかむんじゃなくて、抱え込むようにして(実演する)抱きつけばいいよ」

「本当だ、絶対にはずれないね」

「抱きつくのやだな」

「大丈夫だよ、この方が絶対うまくできるよ」

「じゃあ、やってみるか」

「急に動くと手がはずれてしまうよ。はずれないように気を付けよう」

身振り手振りを交えながらの話し合いが進み、今度こそはムカデが分解しないようにと、意気込んで次のゲームに向かう子供たち。次第に、男女の恥ずかしいという気持ちは消え、どの子も前の子にぴったりとくっついているムカデが完成した。

2回戦、3回戦と進む中で、子供たちは次第に無理な動きをしないようになり、しっかりとリーダーの声を聞き、前の子にぴったりとくっついて動き回るようになっていった。ゲーム終了後、振り返りカードに記入し、輪になって回し読みをした。

「男女関係なく、しっかりと抱きついていたから、よかった」

「Cさんが、前の人に手を回してつかむといいよ、と言う意見のおかげでムカデが分解しなくなった。すごいと思いました」

温かい雰囲気の中、友達の意見に対して認める発言が相次いだ。初め、男子にくっつくことをためらっていたB子がゲームの中でいつの間にかしっかりとくっつくようになった姿が印象的であった。高学年になると、異性を強く意識したり、体の成長を気にしたりする子も出てくるので配慮したい。

2学期は学級がまとまりつつあり、行事に重点を置いたエクササイズを行うことにした。その中で一人一人の活躍に目を向けることで学級での居場所作りをすることにした。そして、低学年と触れ合

う中で高学年としての自覚をもたせることをねらいとした。

(6) 活動<sup>9</sup> 「心の花束」

ア ねらい

- ・ 運動会などの行事を終え、互いに労をねぎらい、たたえ合うことを通して学級として温かい雰囲気を作っていく。

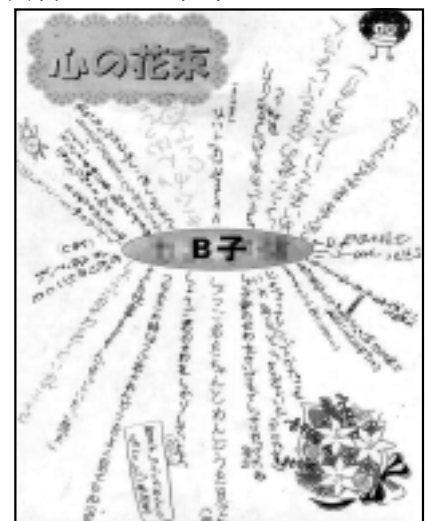
イ 活動の内容

- ・ 輪になって座る。
- ・ 心の花束カードを一人一枚ずつ配る。
- ・ 真ん中に自分の名前を書き、時計回りに紙を送り、真ん中に名前が書いてある子の頑張っていたこと、よかったところを書く。最後に自分の名前を書く。
- ・ 一回りして自分の所に戻ってきたら。書かれていることをじっくりと読む。
- ・ 感想交流を行う。

ウ 参加者の様子と課題

事前に「こんな子すごい子」と題して、運動会で頑張る子供の姿を具体的にまとめた。子供たち一人一人がブレインストーミング方式で題目に対して思いつく子供像をB紙一杯に書いた。それを教室の前面に掲示し運動会に向けて気持ちを高めていった。そして、運動会后その掲示物を見つめながら、友達の頑張っていたこと、よかったところを色紙に書いた。やはりこの場面でもざわざわする子供たちが神妙な面持ちで、色紙に向かい黙々と鉛筆を走らせていた。シェアリングでは「友達からほめられると、先生にほめられるよりうれしいよ」「自分の頑張っている姿を友達がちゃんと見ていてくれたんだ。そのことがうれしい」こういった意見が多く聞かれた。

資料3 心の花束カード



A男は「先生に言われなくても、進んで仕事をしていたよ」とG男に書いてもらったことがうれしかったそうだ。自分のはのんびり屋で周りに迷惑をかけることが多いと思いこんでいたA男にとって、進んで仕事をする姿を認められることが一番うれしかったようだ。B子は重度の自閉症の子と一緒に精一杯活動したことを「すごいよ」「頑張ったね」と書いてもらったことに喜びを感じていた。

行事後にこの活動を行うだけでは盛り上がりや内容の深まりが少ない。事前に行事に向かう過程で、具体的なよい行動や、心構えをもたせ、学級として意欲を高めていく必要がある。そして、精一杯頑張った仲間同士だからこそ分かち合える達成感をもって臨むことが大切である。そうすることで行事に向けて活動した学級を肯定的にとらえ直す機会となる。また、学級が温かい雰囲気の中で結束して、学級の絆ができる効果がある。

(7) 活動<sup>10</sup> 「 で賞」

ア ねらい

- ・ 学芸会での頑張りやよい行動を友達同士で讃え合うことで、学級を温かい雰囲気でもとめ

ていく。

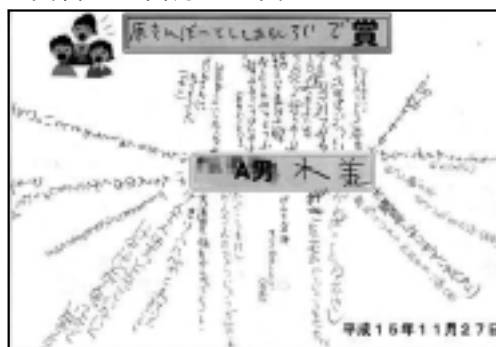
#### イ 活動の内容

- ・ 輪になって座る。
- ・ で賞カードを一人一枚ずつ配る。
- ・ 真ん中に自分の名前を書き、時計回りに紙を送り、真ん中に名前が書いてある子の頑張っていたこと、よかったところを書く。最後に自分の名前を書く。
- ・ 一回りして自分の所に戻ってきたら書かれていることをじっくりと読み、自分へ「 で賞」のを考えて賞を書き込む。
- ・ 感想交流を行う。

#### エ 参加者の様子と課題

運動会の時の「心の花束」と違い、自分への賞を考えることで、学芸会で頑張った自分を見つめ直す機会となった。舞台裏の大道具係や、各教室の下級生の指導など、目立たず、縁の下の力持ちとして活躍する場面が多い行事であった。そのため友達が自分のよい行動を見てくれたことを実感したとき、喜びが倍増する様子が見られた。B子は感想の中で「私は1年生の面倒を見ていた。目立たないところで、自分は頑張っていた。H男はそんな自分の頑張っている姿を見てくれた。同じようにI男、J男、K男、L男も見ていてくれた。みんなが見てくれた。みんなは友達のよいところを見ていてくれるんだ。それが分かってうれしい」と言っていた。

資料4 自分への賞



#### (8) 活動<sup>12</sup> 「一緒に作って食べよう」(一年生との合同授業)

##### ア ねらい

- ・ 1年生と一緒に調理実習をすることで、6年生としての自覚を再認識できる。

##### イ 活動の内容

- ・ 1年生が生活科でそだてた「さといも」「梅干し」をもらい、6年生が家庭科で学習した「炊飯後おにぎり作り」「みそ汁作り」をグループごとに行う。
- ・ 6年生と1年生が交互にテーブルを囲んで座る。そして一緒に会食をし、感想を話し合う。
- ・ グループごとで会食をする。おにぎりを持ち、おにぎりに話しかけながら、右隣の子に「今日のご飯はおいしいですか」と問う。隣の子はそれに答え、さらに隣の子に話しかける。
- ・ 6年生は1年生の子が頑張っていたこと、できるようになったことを振り返りカードに書く。また、1年生は6年生にしてもらってうれしかったことを振り返りカードに書く。
- ・ 6年生は1年生に自分に対する感想を聞いた後、自分の活動を振り返り振り返りカードに記入する。
- ・ 学級全体に発表する。

##### ウ 参加者の様子と課題

1年生からもらったサトイモの皮むきを、1年生の子に教える6年生。包丁の持ち方、ピラーの使

い方、生ゴミの捨て方など、一つ一つ手本を見せながら教える姿はとても優しく見えた。普通の調理実習では自主的に動けないA男が一年生の子に「包丁はにゃんこの手で持つんだよ」「おにぎりはこうやって握ると、うまくできるよ」と優しく教えていた。腰を低くし、1年生の目の高さになって教える光景は、6年生の学級の中では見られない姿であった。B子はネギを切る1年生の子をととてもほめていた。そして、ほめられた子も「ありがとう」と言って、B子にくっついてきた。振り返りカードには「包丁でうまく、サトイモやネギを切って、きれいにきざんですごくうまくやっていました」とほめていた。その1年生が、自分の感想を振り返りカードに書きはじめたのだが、うまく書くことができず、泣き出してしまった。すると、そっと肩を抱いて、「大丈夫だよ。私と一緒に書こうか」と声をかけていた。その姿を見て、他の6年生の子が「B子は、本当に下級生の面倒見がよくなったよな」と感心していた。

異学年集団の活動なので、お互いのよさを見出し、上級生は下級生を見守り、下級生は上級生を敬う姿が見られるようになった。

1年生と6年生では発達段階が大きく異なる。そのため同じようなシェアリングを組もうとすると、1年生は戸惑う姿が見られるので、学年にあったシェアリングを考える必要がある。

3学期は卒業に向け、今までの自分や学級を振り返ることでお互いの成長を認め合いたいと願った。そして、たくさんの思い出と共に自分たちを支えてきた人の存在に気付き、感謝の心ももって欲しいと願った。

(9) 活動16 家庭科・学級「感謝の気持ちを込めて～編物～」

ア ねらい

- ・ 自分の成長を振り返り、成長の中でお世話になった方に感謝の気持ちを込めたプレゼントを作り手渡す。保護者会に時に手渡すようにすると良い。

イ 活動の内容

- ・ 事前に自分の成長アルバム（産まれてから）をつくり、お世話になった人を考える。
- ・ お世話になった人へのプレゼントを家庭科で作る。
- ・ 学級活動の時間に成長アルバムに書かれている思い出をカード（6枚）にする。
- ・ カードを使い、誰の思い出かを当てるゲームをする。
- ・ 最後に、自分がお世話になった人へプレゼントを手渡す。

ウ 参加者の様子と課題

プレゼントは何を作りたいか聞いたところ『編物』が圧倒的に多かった。しかし、編物を初めて経

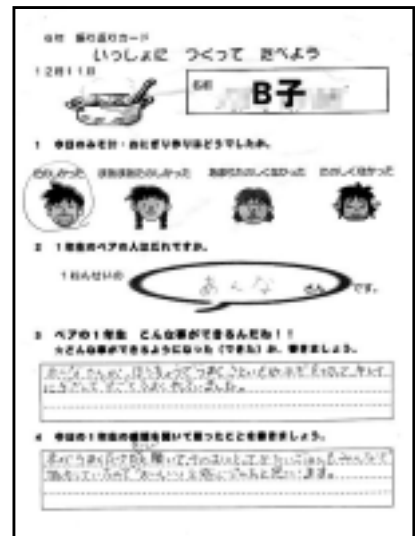
写真1 サトイモの皮むき



写真2 2人でシェアリング



資料5 ふり返りカード





験する子どもが23人中19人もいた。困っていると、強力な助っ人が名乗り出てくれた。おばあちゃん達と経験のある子供たちである。おばあちゃん達の協力(写真3)のおかげで手先が不器用な子も何とか編物を完成させることができた。B子は編物の経験があり、先生役を買って出てくれた。うまく編めない子に一つ一つ丁寧に教えることができ、友達から「B子はすごいな。絵も上手出し編物も上手だ」と何度もほめられていた。休み時間にはうまく編めない子につき合っ編んでいる姿を何度も見かけた。A男は自分の祖母が先生としてきてくれたことがうれしく、細かい作業を苦手にしてきたがこの時ばかりはとも張り切って編んでいた。慣れてくると編むことが楽しいのか、休み時間にも黙々と編んでいた。

写真3 おばあさんの編み方指



プレゼントを手渡す前に成長アルバムのクイズを行った。4つのグループに分かれ、それぞれ隣のグループのメンバーについて書かれた思い出カードを手渡した。その思い出が一体誰のものを考えた。このクイズは授業参観の時にいき、保護者の方と一緒に考えることにした。『1歳の頃階段から落ちて大けがをした。』を読み、「あなたもこのころ大けがをしてね・・・」とクイズに書かれた思い出を基にグループ内で保護者を交えた会話が弾んでいった。自分に記憶がない小さい頃の母親・父親の苦勞を聞いていくうちに、子供たちの顔がだんだん真剣な表情に変わっていった。そして、隣に座っている保護者のために作ってきた編物を手渡す時がきた。このプレゼントの存在は保護者にはずっと内緒にしていた。ニコニコしながら、保護者にマフラーやハンカチ、鍋敷きを手渡す子供たち。思いもよらなかったプレゼントに感激する保護者もいた。子供たちは照れながらも、晴れ晴れとした顔をしていた。A男は一生懸命に編んだマフラーを母親の首に巻いていた。「まっすぐに編むことができなかったマフラーだけど、気持ちはこもっているよ」と話していた。B子は照れた顔をしながら、「はい」と言って手渡し、やはり母親の首にマフラーをかけていた。

## 4 効果と課題

### (1) 学級の変容

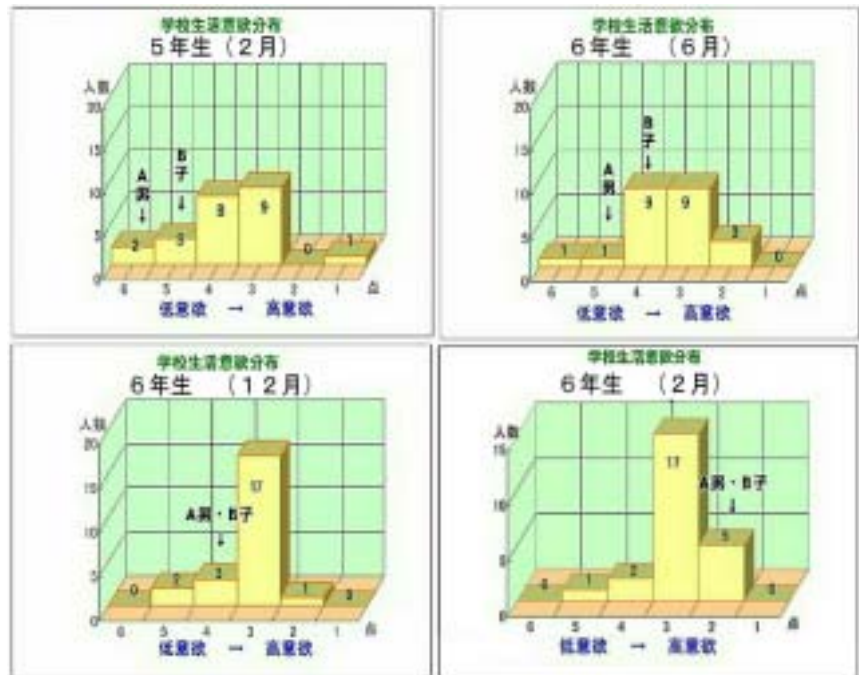
友達を認めることは認められる経験がないとできないと言うことを実感した。だからいろいろな出来事があるごとにみんなで拍手したり、おめでとうと言ったりした。中でも好評だったのが「ハッピーバースデー」である。誕生日の日に、朝の会の場で学級のみんなから「ハッピーバースデー」の歌を歌ってもらう活動だ。始めた頃は冷めていた子供たちも、祝ってもらう子が少しずつ増えてくると「次は君だね」とハッピーバースデーの歌を楽しみにし始めた。歌が盛り上がるようになるにつれて、学級の雰囲気も少しずつ変わってきた。祝ってもらう子がみんなの目の前で、少し照れながら「ありがとう」と言う回数が増えるにつれ、友達に認められることのすばらしさ、認めることの楽しさを味わうようになった。また、グループ・アプローチの中でも「友達の考えを知る」「友達のよさを見出す」活動を多く行った。これらの相乗効果で少しずつ学級が温かい雰囲気になっていった。

3学期に入ると卒業を意識しはじめていった。単なる卒業式を迎えるのではなく、今までの成長を振り返り、決して1人で生きてきたのではないと感じ取ってもらいたいと願い、「編物」「思いでビンゴ」「カウントダウンカレンダー」などを行った。子供たちは誰かに支えられて成長してきたこと

を認識していった。そして、友達も自分と同じように誰かに支えられ、または誰かを支えてきたことを知った。思い出を振り返ること

図1 学校生活意欲度の変化

という気持ちも高まっていった。しかし、卒業はさげられない。ならば、たくさんの思い出を胸に、今まで過ごしてきた学校や仲間を大切にしていきたいと思うようになっていった。卒業文集や校内美化運動がその思いを具体的にしたものだ。自分たちで役割を分担し、計画し、実行・編集した文集作り。子供たちは校内のワックスがけや掃除を計画した、自主的に動くことができた。動き始めると争い事が起きていた1学期を思うと、信じられない姿がそこにはあった。卒業式は大粒の涙の中、行われた。また、在校生が泣き始め、送る言葉が詰まってしまう場面があり、ここ数年の卒業式には見られなかった光景があった。



学校生活意欲分布を見ると、この一年で低意欲から高意欲への推移が見られることが分かる。また、学級生活満足度の分布に変化が見られる。

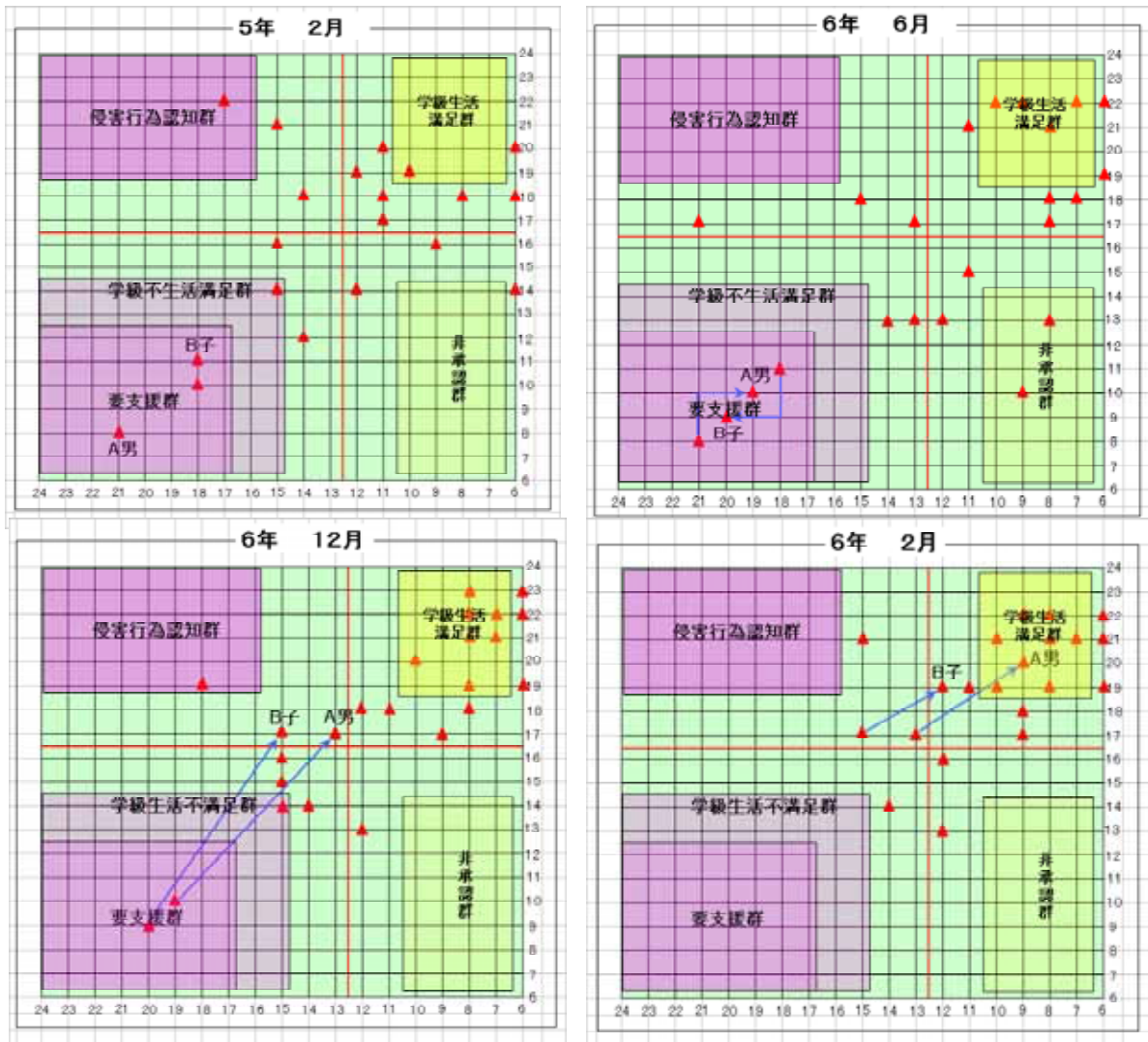
学級生活満足群	39.2%	52.2%	65.3%	82.7%
学級生活不満足群	30.4%	17.4%	17.4%	4.3%
非承認群	17.4%	17.4%	4.3%	8.7%
侵害行為認知群	13.0%	13.0%	13.0%	4.3%

このように学級生活に対し満足している子供が増えてきている。中でも、A男、B子の変化には目を見張るものがある。グループアプローチの活動を通して人から認められる活動を多く取り入れたことでA男やB子などのように、普段目立たない存在の子供たちにも光が当たるようになる。多くの友達に見つめられている。しかもそれが自分を肯定的にとらえて見つめられていることを知ったとき、子供たちは安心感を持つようになっていった。

6月中旬のQ-UでA男、B子が「学校生活不満足群」(図2)に属していた。しかし、夏休み前の言動を見ていると、B子は活発に外で遊ぶようになり、心情の変化が見られた。A男はなかなか友達の良いところを認めることができず、自分は周りから認められていないと感じていることがあったそうだ。しかし、いつも一緒にいる友達ができただけで、様々な活動に対しやる気を見せるようになってきた。

「運動会」「学芸会」と大きな行事を通して子供たちは目に見えない成長を遂げた。特に学芸会後に行った「  
で賞」の活動では子供一人一人が頑張ったことをお互いに讃え合う姿が見られた。自分だけが知っている「頑張っていること」を友達が見ていてくれたことに気付き、友達の大切さを喜ん

図2 学校生活満足度の変化



でいた。また，1年生と一緒に活動した「一緒に作って食べよう」では，6年生が1年生を手取り足取り丁寧に活動を支える姿が見られた。普段はみんなの足を引っばていると感じていた，A男は，1年生の子に「教えてくれてありがとう」と言われ喜んでた。A男は学芸会で学級のみならず「劇での頑張り」を認められ，「ぼくはみんなから『源さんの役がとても良かった』とほめてもらえた。この役をやって良かった」と，とても喜んでた。このことと，「一緒に作って食べよう」の活動を体験する中で普段の生活に意欲が見られるようになってきた。「思い出ビンゴ」の中に自分の話題が出てきたことで自分の存在価値をより確かなものにしていくことができた。そして「編物」では今までにない頑張りを見せ「B男はすごい」と友だちから認められるようになっていった。A男は普段の生活態度に変化が見られるようになってきた。友達と協力して活動ができるようになってきたし，様々なことに意欲的になった。その一つの例に宿題がある。2学期半ばまで宿題の提出率は10%を切っていた。しかし，今では100%と言ってもおかしくないくらいきちんとやってくる。その変化が見られはじめたのが学芸会後の「賞」と「一緒に作って食べよう」の活動の頃からである。賞では自分の存在価値を，周りから大いに認められる機会となった。劇や器楽合奏で頑張った結果，認められたことで，「頑張ればできる。みんなは見ていてくれる」という安心感と達成感を味わうことができたからだ

と思う。

卒業の言葉の中で「昔、ぼくはいじめられていた。つらく学校に行きたくないと思った。でも、今は学校が楽しい。上級生になった時、ぼくがされてきたようなことを下級生に絶対にしてはいけない。楽しい上級生になりたいと思った」と語っていた。

B子は、自分のよさが「下級生の面倒見のよさ」ということに大きな自信をもち始めていた。「あなたはステキ」の活動を通して、「自分がそんなにおもしろいとは思わなかった」「自分の良いところが分かってこれからはもっとおもしろくしていこうと思った」と振り返り、自分のよさを見出し始めた。そして、「心の花束」で、自閉症の2年生の男の子の手を取り、運動会に参加したことを友達から「すごい」と認められた。そして、自分は下級生の面倒見が良いというよさがあることに気づき始めていった。更に「一緒に作って食べよう」の中で1年生の子とのスキンシップの中で「自分のよさ」をさらに確かなものにしていく姿が見られた。周りも「B子の優しさ」を認めるようになっていった。1月20日に6年間の思い出を紙に書いた。その中でB子は「みんなといると笑えて、おこれて、安心できて、楽しくて、しかし6年間、一番6年が楽しかった。けんかもあったけどすぐ仲直りができました。6年になって責任を感じて、おしつぶ(され)れそうになったり、緊張したり、でも、この6年生のみんなと一緒にいたから乗り越えられたと私は思う」と書いている。

六年生 B子のメモ  
みんなといると、笑えて、おこれて、安心できて楽しくて、六年間、一番6年が楽しかった。けんかもあったけどすぐ仲直りができました。しかし6年生になって責任を感じて、おしつぶ(され)れそうになったり、緊張したり、この6年生のみんなと一緒にいたから乗り越えられたと私は思う。

資料6 B子のメモ

今、B子は学級での居心地を最高に快く感じている。また、卒業文集の編集委員を買って出てくれた。頁のレイアウト、内容、校正を一手に引き受けて友達と一緒に頑張ることができた。そして、その編集後記の中で「正直つかれた。でも協力し合えたからよい経験になった。それに、最後の協力というか、団結があったのがうれしい」と書いている。B子は4月当初「この学級はばらばらだから嫌だ。誰も信用できない。だから1人で遊んでいる」と言っていた。そのB子が「最後の協力、団結」という言葉を使っている。「最後の」には今までに団結・協力がいくつかあったことを感じさせる言葉である。B子にとって学級が団結していくのを目の当りにした一年であった。

## (2)課題

一年を通して思ったことはエクササイズとエクササイズはどこかでつながっているということだ。今行っているエクササイズで子どもが感じていることは、以前のエクササイズの実験を踏まえていることが実践の中で数多くあった。だから、計画が必要である。その計画を立てるためには、学級の持つ問題点と子ども一人一人の悩みをしっかりと分析することが大切である。そのためには教員と子供はいつも同じ目の高さで考えることが必要不可欠だと思う。

### <参考文献>

- 諸富祥彦 『エンカウンターこんなときこうする』 (図書文化社、2000)
- 國分康孝 『エンカウンターで総合が変わる』 (図書文化社、2000)
- 國分康孝 『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集』 (図書文化社、1996)
- 坂野公信 『学校グループワークトレーニング』 (遊技社、1989)
- 星野欣生・津村俊充 『Creative School』 (プレスタイム、2003)